

西川長夫教授と国際関係学部の12年

国際関係学部を設置する方針が建てられて、1985年に「国際関係学部設置委員会」が作られたときに私も法学部から委員として参加し、当時文学部に所属していた西川先生の知遇を得ました。

私は若いときに西川先生の「ボナパルティズム論」の論文に接して、緻密な文献考証と歴史考察に驚いたとき以来、西川先生のお名前はよく知っていましたが、その印象があまりに強かったためにしばらくの間は先生が政治学者だと勘違いしたものでした。先生がフランスの政治学者のデュベルジェの本を翻訳されたことも私の誤解に輪をかけた原因でした。

それから10数年経って、学部設立という大学運営の局面で一緒にできることになりました。

西川先生は、設置委員会でおもに研究面の方針作成を担当され、生成期にあった（いまも発展途上ですが）国際関係学をこの学部から作り出していくための構想を出され、学部創設2年目の1989年には研究委員長として、基本路線を敷かれました。その後を引き継いだ私たちの世代が、たとえば学部紀要の「立命館国際研究」を先生の構想されたような内容に作り上げているかと問われると、内心、忸怩たるものがあります。

教育面では、「外国語にも強い国際関係学部」を目指そうということになり、専門科目を英語で受講できるだけの力をつけるために、他の大学で見られるようになってきていた「英語1言語教育」の可能性も検討されましたが、結局、英語に重点を置きつつも「英語と第二外国語（初修外国語）の2言語の習得」というカリキュラムが確定されました。このときも西川先生の発言が大きな方向付けになったと記憶しています。

1993年度から1994年度、および1997年度から1999年度の2回にわたって国際言語文化研究所長を引き受けられて、多くの研究者を結集して共同研究に取り組み、『「米欧回覧実記」を読む』など、日本の学界を揺るがす成果を公刊されてきました。西川所長のもとで、国際言語文化研究所が立命館大学

の中心的な研究センターとなっただけでなく、日本の文化研究に重要な地歩を築いたことをありがたくまた誇らしく思っております。

国際関係学部は西川先生の到達された地平を引き継いでいくという重い責務を負っています。しかし、それはきわめて遠い道のりでもあります。先生は、『フランスの解体？ - もうひとつの国民国家論』のあとがきで、「したがってフランスの解体というテーマは、多分に私自身の解体を意味することになるだろう」と書かれていますが、アメリカ研究者である私が、アメリカとの間でこのような学問的緊張感を果たして持ち得るだろうかと思いつつ、先生への感謝を申し述べる次第です。

2000年3月

立命館大学
国際関係学部長

安藤次男